

鼻副鼻腔結核の一例

小野田 友 男¹⁾ 岡 野 光 博¹⁾
富 永 進¹⁾ 野 宮 重 信¹⁾
西 崎 和 則¹⁾ 丸 中 秀 格²⁾ 竹 久 亨²⁾

1) 岡山大学大学院医歯薬総合研究科 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

2) 津山中央病院 耳鼻咽喉科

再興感染症として結核は重要であるが、鼻副鼻腔での発症はまれである。今回、我々は、保存的加療の後、手術を施行した鼻副鼻腔結核の一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は31歳女性、肺結核の既往がある。近医にて鼻腔内に肉芽腫性病変を指摘・生検され、壊死性病変との結果で当科を紹介受診された。下甲介粘膜が易出血性に腫脹し、白苔をともなっていた。CTにて右上顎洞から篩骨洞にかけて陰影がみとめられた。生検は全身麻酔下でおこなった。鼻内は易出血性のもろい肉芽が充満していた。鼻腔と開放した上顎洞から生検、結核菌群PCRは陽性で、塗抹検査ではガフキー1号であった。培養でも結核菌が分離され、鼻副鼻腔結核と診断した。INH300mg, RFP450mg, EB750mgの内服とSMネブライザーを開始したが、画像上の上顎洞病変の退縮がおもわしくなく、上顎洞根本術を施行した。

質 疑 応 答

質 問

鼻腔のTbは呼吸路であるから、肺結核同様に嚴重に扱うべきでは？

応 答

保健所に結核予防法第29条（入所命令）の適応を嘆願したが肺外結核で排菌なしとして認められなかった。しかし、我々は結核病棟への入所、接触者の追跡など、嚴重に処置をおこなった。

質 問 鈴木立俊（北里大）

鼻副鼻腔炎結核は、排菌の可能性を常に考慮すべきで、結核予防法での肺外結核に分類されるからといって、院内感染防止の観点からは患者の対応をしっかりと行うべきである。

応 答

結核担当の呼吸器内科医師が、PCRを肺結核の活動性の指標にしていると聞き、参考にした。

連絡先：小野田友男

〒700-8558

岡山市鹿田町2-5-1

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科

耳鼻咽喉科

TEL 086-235-7307 FAX 086-235-7308